

### 悲劇の十日間(クーデター発生からマデロ暗殺まで)

1913年2月9日朝七時、メキシコ駐在公使堀口九萬一は突然銃声を聞き、ただならぬ気配を感じた。三十分して知人からの電話で、騒動が発生したとの知らせを受けただけで、何が起きているのか状況はわからなかった。銃声は近かった。公使は様子を見るため馬車を駆って街へ飛び出したが、むやみに動けば危険だと、思いなおして大統領官邸へ向かうことにした。その日は日曜日で人通りは少なかった。官邸には大統領夫人しかいなかった。大統領は電話で急報に接し、五十名ほどの士官候補生を連れて応戦に駆けつけたということであった。公使は気遣っているいろいろ慰めの言葉をかけているうちに、公使夫人から電話があり、自分も見舞いに行きたいということで、急遽夫人を迎えに馬車を返した。公使夫人は大統領の家族と公私共に深い交わりがあり、気が気ではなかった。堀口公使夫妻のほかまだ誰も見舞いには来ていなかった。公使は邦人を案じ、夫人を残してとりあえず公使館へ帰ることにした。<sup>124</sup>

公使館には六人乗りの乗用車が二台横付けされていた。不審に思いながら中に入ると意外にも大統領の両親が、秘書官二人、娘さん三人とその子供たちが四人、加えて召使い数名、総勢二十二人が避難してきていた。そろそろ昼の支度もせねばならず、大急ぎで公使夫人を呼び返した。街は騒然としてきて、公使夫人が帰ってきたのは午前十一時になっていた。一時過ぎ大慌てでこしらえた食事を済ませた頃、自動車の音がし、出てみると大統領夫人が侍女一人を連れて到着されていた。期せずして大統領の家族全員が日本公使館に非難することになった。メキシコ人が普段日本人をどのように思っているか、これがその証である、と堀口公使は後に述懐している。<sup>125</sup>

2月9日、日曜の朝未明、チャプルテペック城の森の警備員は異様な音で目を覚ました。縦隊を組んだ部隊がメキシコ市の中心部に向かって東へ行進していた。向かっているのは明らかにナショナル・パレスであった。この異常な軍事行動は公認されたものではないと直感した警備員は車に飛び乗り、二マイル半ほど離れた場所にいるナショナル・パレスを管理する主計総監、アドミラル・アドルフォ・バツソに報告した。不穏な動きがあることを察知していたバツソは報告が事実であることを確信し、ロンドン街に住む大統領の弟グスタボ・マデロの住居に向かった。グスタボはいよいよ来るものが来たと、自家用車に乗り込んでバツソと共にパレスに向かった。彼らが確認した部隊は、ジェネラル・モンドゥラゴンが直轄するタクバヤ駐屯守備隊に属していた。モンドゥラゴンはこのとき未だ、パレスには向かっていなかった。共謀者フェリス・ディアスとベルナルド・レイェスはまだ刑務所にいた。モンドゥラゴンは先ず二人を解放し、しかる後にナショナル・パレスに向かうことにしていた。パレスは無抵抗で占領できるはずであった。<sup>126</sup>

ディアスとレイェスは以前、共にマデロに対して反乱を起こしていた。マデロは反逆罪

で直ちに処刑すべきであった。ディアスは前大統領ポルフィリオ・ディアスの甥、レイェスは元ヌエボ・レオン州知事であり、二人とも紳士であったということで禁固刑に処せられ、ディアスはレクンベリ刑務所、レイェスはサンティアゴ・トゥラテロルコにある軍の刑務所で、それぞれが快適な獄中生活を過ごしていた。彼らはマデロの寛容さに感謝するどころか、直ちに政府転覆の陰謀を企て、互いに連絡を取り合っていた。127

モンドゥラゴンは、アドルフ・バツソは抵抗しないだろうし、トゥラルパンにある士官学校から候補生をパレスに配置してあったので、反乱部隊が到着する前に、パレスは制圧済みであると思っていた。二つの刑務所間の距離は六、七マイル離れていたため、モンドゥラゴンは二隊に分け、ジェネラル・グレゴリオ・ルイスの騎兵分遣隊をレイェスのいるサンチャゴ・トゥラテロルコへ、主力部隊はレクンベリのディアス解放に向けた。ジェネラル・レイェスはまだ暗いうちから制服を着て待っていた。レイェスは馬に乗り二百の騎兵を先導して、パレスに向かった。レクンベリではディアスがまだ髭をそっているところへ分遣隊が到着した。ディアスはいらいらして待っていたモンドゥラゴンに加わり、かなり遅れてパレスへ向かった。128

グスタボはチャプルテペックにいる兄に連絡しても無駄だと思った。彼はバツソと共にパレスへ急行し、反乱主導者ではなく政府に忠誠を尽くすよう衛兵を説得した。バツソはメキシコ市守備隊長ジェネラル・ラウロ・ビヤールを呼び寄せた。ビヤールは直ちに候補生を配置に付け、城壁に機関銃を設置し、ソカロの大きな広場に入った反乱軍をなぎ倒す態勢を整えた。パレスが敵に防備されていることに驚いたジェネラル・レイェスは暫く躊躇したが、虚勢を張ってジェネラル・ルイスを送り込み、降伏を要求した。ビヤールはルイスの馬の手綱を掴むと、蔑むようにルイスを睨んで反乱罪で逮捕すると言った。ルイスはそれに従って馬を降りた。そのとき銃声が轟き、レイェスが馬を前に進めようとしたその瞬間、護衛兵の集中砲火を浴び、馬から転落する前に絶命した。十分後ソカロには三百人の死体が横たわっていた。殆どが反乱兵士であったが、中には市民もいた。殺戮現場に到着したディアスとモンドゥラゴンは動揺した。彼らはパレス占領が失敗したときのことを考えていなかった。とりあえず退却する途中、誰かがシウダデラ要塞の防備が手薄であると二人に入れ知恵をした。フェリス・ディアスは反乱軍の指導者となり、シウダデラとその周囲数ブロックを占領した。シウダデラには弾薬や物資がふんだんにあった。129

レイェスが斃れ、ディアスが窮地に陥ったところを見ていたグスタボはチャプルテペックの官邸にいる大統領に楽観的な報告をした。首都の周辺には四千の連邦軍がいたし、シウダデラに立て籠もった千八百の反乱軍への補給を断れば、クーデターは失敗に終わると思っていた。大統領も同感であった。グスタボからの知らせを聞いて、マデロは民衆の前に姿を見せようと、アラビア馬に乗り、儀仗兵を伴ってパセオ・デ・ラ・リフォルマへ出てパレスに向かった。沿道の群衆に手を振って応えながらアベニダ・フアレスまで進んだ頃、狙撃兵の弾が飛び交うようになり、行進は遅れがちになった。射撃が正確さを増し、傍観

者が倒れる事態になり、マデロは近くの写真館へ避難し、砲火が止むのを待つことにした。マデロがこの写真館にいる間、彼の運命が転機を迎えることになる事が次々と起った。パレスでの戦闘で、ジェネラル・ビヤールが重傷を負ったとの知らせが届いた。マデロが後任の指揮官を誰にしようかと思案しているところへ、ジェネラル・ビクトリアノ・ウエルタが現れた。ウエルタはナショナル・パレスを含めた首都の防衛軍司令官に自分を起用してもらいたいと申し入れた。マデロは悪い予感がした。マデロはウエルタを司令官から解任したばかりであった。理由は職権乱用、残忍な行為、飲酒、使い込みなどであった。ウエルタは深く降格されたように見せかけてはいたが、内心激怒していた。不満を募らせていたウエルタはクーデターの首謀者モンドウラゴンから陰謀に加わるよう誘いを受けていた。ウエルタは断った。理由はマデロへの忠誠心からでなく、自分が首謀者の部下になりたくなかっただけであった。このことをマデロは知らなかった。130。

しかし、ウエルタは前年のオロスコの反乱に見せたように、有能な軍人であった。ウエルタは言葉巧みに大統領に忠誠を誓った。マデロはパレスの防衛部隊の指揮官にウエルタを任命し、出来る限り早い時期に入れ替えようと考えた。ビヤールを負傷させた一発の弾丸がマデロ一族を倒した。マデロはとりあえずナショナル・パレスに入った。ウエルタは防衛軍指揮官の任務に付くなり専横振りを発揮した。ウエルタは朝ソカロでビヤールに降伏したジェネラル・ルイスを呼び出し、ルイスの哀願を無視して、裁きにかかることなく銃殺を命じた。反逆を認めた旧知の同僚ジェネラルを、大統領の許可を請う事もなく処刑した。恐らくルイスは知り過ぎていたと思われる。マデロは何も言わなかった。

その日の午後、不安に駆られたマデロは七十五マイル離れたクエルナバカへ車で向かってベヤ・ピスタ・ホテルに入ると、最近ウエルタと入れ替えたばかりのサパタ討伐軍司令官フェリペ・アンヘレスを呼んだ。アンヘレスは後にパンチョ・ビヤの参謀になる連邦軍では異色のジェネラルであった。信頼できるジェネラルを手元に置きたかったマデロは、アンヘレスに首都へ一緒に帰ることを命じた。マデロの人選は間違っていた。アンヘレスは紳士であり、ウエルタと怒鳴りあいの喧嘩をするようなことは一切出来なかった。マデロとアンヘレスはウエルタに屈服させられた。アンヘレスは大部分の部隊をつれてメキシコ市に到着した。しかし連邦軍の上官たちの多くはアンヘレスがそのような役に付くのを歓迎していないことを彼は察知した。マデロの努力にも拘らず、ウエルタと親しい陸軍相アンヘル・ガルシア・ペニャは、アンヘレスの階級が低すぎるのを理由にマデロが要求する、アンヘレスを参謀総長にすることを断固として拒否した。ウエルタはシウダデラを取り巻いた政府軍の総指揮官をアンヘレスに譲ることを拒み、従順なアンヘレスを余り重要でない地域に追いやった。ウエルタの意のままにされ、マデロは抵抗することをあきらめた。

131

無理強いして連邦軍に反発されるのを恐れたマデロは折れた。アンヘレスはメキシコ市の一角にある砲兵隊の指揮をすることになった。アンヘレスは悲劇の十日間、ウエルタの真

の企みについて何の知識もなかった。しかし、彼は反乱軍に対する一連の軍事行動に異常を感じた。砲を発射して気が付いた。彼がシウダデラに的を絞ってセットした照準を誰かが変えていた。しかしアンヘレスがこの事を重大事としてマデロに警告したという記録は残されていない。後世の歴史家はアンヘレスが何故この事をマデロに報告しなかったのかについて論争した。彼がクエルナバカから連れてきた部下たちは、彼に対し殆ど叛乱を起す寸前であった。当時の連邦軍のジェネラルたちは部下の略奪、狼藉を黙認していたのに、アンヘレスはこれを厳しく取り締まったため、部下の不満が高まっていた。132

次の日2月10日月曜日、首都は静かであった。火曜日、市民が最も恐れていたことが起きた。その日の朝、ウエルタは犠牲者が多い割には成果の上がない攻撃を、シウダデラの周辺に配置された反乱軍へ仕掛けた。五百人の兵を失ったウエルタは歩兵攻撃を止め、ソカロからシウダデラと周辺を砲撃した。互いに僅か一マイルしか離れていなかったにもかかわらず、双方とも的が絞れず、なんの効果も見られなかった。多くの砲弾が打ち込まれたが、パレスには二発、シウダデラには一発が着弾しただけであった。パレスとシウダデラが被害を免れる一方、両地点の間に位置する市街は情け容赦なく打ち碎かれた。家は潰れ、通りは機銃掃射された。送電は停まり、食料はなくなり、犠牲者の山が出来た。死体の処理が追いつかず、腐敗が進んだ。脱獄囚が暴徒に加わって略奪の限りを尽くし、普段静かな外国人居住区にもパニックが広がった。犠牲者は五千人に達した。ポルフィリオ・ディアスの時代は平穏であったし、1911年の動乱は国の北部に限定されていたので、首都はこれが最初の戦場となった。メキシコ市が恐怖に包まれている一方でシウダデラは十分な物資の供給を受け、ビールやシャンパンもふんだんに持ち込まれていた。そうこうする内にウエルタは反乱に加わる決心をした。ディアスと反乱軍を閉じ込めている間に、必然的に自分が主役になった。火曜日、砲撃が開始された朝、ウエルタとディアスは双方の友人宅で落ち合った。その後の五日間の戦闘中、ウエルタはマデロ支持者からなるルラーレ部隊をシウダデラに向かって突貫攻撃をさせ、ディアスの機関銃で殲滅させた。ウエルタは的確に作戦を進めた。マデロにはもう一人の敵がいた。それはアメリカ大使ヘンリー・レーン・ウイルソンであった。133

ウイルソンは五十六歳、二年前マデロ革命が始まった頃、タフト大統領によってメキシコ大使に任命された。強度な飲酒癖のあるウイルソンは生え抜きの外交官ではないが、メキシコに来る前、チリとベルギーで外交官としての経験を積んだ。ウイルソンの弟ジョン・ロックウッド・ウイルソンは上院議員で、彼自身はグッゲンハイム・グループと関係があったとされている。メキシコでは企業家、弁護士、出版関係者などに取り巻かれたウイルソンは大使の権限をはみ出し、過度にメキシコの政治に関心を示した。ウイルソンがマデロを毛嫌いした理由は、彼の関係していたアメリカ資本がマデロ一族の所有する鉄鋼会社と競合関係にあったためとも言われている。134

ワシントンへの報告はマデロに対する苦情で満ち溢れていた。マデロもウイルソンの傲慢な態度に我慢できず、1912年暮れ、大統領に選出されたばかりのウッドロウ・ウイルソンに、密かにウイルソン大使の更迭を要求していた。2月9日、クーデターが始まった日の午後、ウイルソンは列国の外交関係者を招いた。他の国々は大使ではなく公使を送り込んでいたので、ウイルソンは自ずと指導的な役割をはたしていた。それと同時に、各国は国境を接する大国アメリカを安全のよりどころとしていた。その日の議題は市街戦の危険からどう身を守るかについてであった。メキシコ市には二万五千人の外国人が居住し、そのうちの五千人がアメリカ人であった。かれら上流社会の人々は、戦いが行われている市の中心、ナショナル・パレスとシウダデラの周辺に住んでいた。本国からの白紙委任状を持っているウイルソンが両者を説得し、停戦が実現すれば、彼らの安全は確保できると皆は思っていた。ウイルソンはその日の午後、マデロの外務大臣ペドロ・ラスクラインに会見を申し入れた。135

ラスクラインとの会談では何ら得るものがなかった。彼はシウダデラの反乱軍にたいし影響力はなく、外国人の安全についても保障できなかった。その日の午後遅くフェリス・ディアスの代理人を呼び、ウイルソンは同じような要請をした。ウイルソンがマデロよりはディアスに好意を寄せていることは当初から明らかであった。その夜ウイルソンがワシントンへ送った報告では、反逆者が市民から受けている支持について大げさに誇張し、群集は整然としてピバ・ディアス、マデロに死を連呼した、と書いた。同時に寄せられた地方の領事からの報告ではディアスへの支持は殆どないことが報告されていた。アメリカの新聞は領事からの報告を支持し、ウイルソンの報告と全く反対であると報じた。2月10日、戦闘が休止している間、ウイルソンはメキシコ政府に対する影響力を行使しようと奔走した。彼は脅しの常套手段であるアメリカの軍事介入を仄めかした。ウイルソンは二度にわたりワシントンへ電報を送り、しかるべき大きさの艦船をメキシコの港へ送ることを進言した。軍事介入の脅しは既に包囲されたメキシコ政府に更なる重圧を与えた。ワシントンはそれに応え、ベラクルース、タンピコ、アカプルコ、マザトランへそれぞれ艦船を送ることにしたが、それらは監視と報告が目的であり、それ以上の行動を硬く禁じた。さらに國務長官フィランダー・ノックスは、政策の変更はしないこと、政府・反乱軍いずれにも加担しないと釘を刺した。136

2月11日火曜日、戦闘が再開し、市街地の破壊が始まった。アメリカ大使館も安全ではなかった。周囲の家で砲弾が炸裂し、大使館の建物の後部に弾丸が打ち込まれた。アメリカ人も他の外国人も大使館に避難し、その数は百七十五人に達した。この時点でウイルソンはマデロに会う決心をした。12日水曜日、オーストリアとスペインの公使と共にウイルソンは銃弾の音を聞きながらパレスに向かった。マデロはウイルソンの抗議に怯むことなく、反乱を起こしているのは自分ではなくディアスであると撥ね付けた。アメリカ人が危険に直面していることについてはタクバヤに避難することを勧めたが、市内にいないと

業務が出来ないと、ウイルソンは断った。ウイルソンは攻勢に出た。タフト大統領はメキシコ市の事態に重大な関心を寄せている、とウイルソンは切り出した。三千の海兵隊を乗せたアメリカの艦船がメキシコの港へ向かっていると脅し、マデロがショックを受けるのを見て喜んだ。137

14日金曜日、政府は分裂の兆しを見せてきた。ラスクラン外相がアメリカ大使館にウイルソンを訪ね、閣僚はマデロの辞任を求めていることを明かした。この時点でウイルソンは未だジェネラル・ウエルタと連絡を取っていなかった。この危機にウエルタが重要な役割を果たしているとは思っていなかった。その日の午後、ウエルタからの使者がやってきてウイルソンの考えは変わった。この男に会わないほうがいい、という忠告にもかかわらず、ウイルソンは使者を招き入れた。男はジェネラル・ウエルタからのメッセージを伝えたいといった。ディアスとウエルタが合議することについて、大使は良案と思うか、という質問であった。この会談の記録は残されていないが、翌日ドイツ公使とパレスを訪れたウイルソンは、マデロではなくウエルタに面談を申し込んだ。ところがマデロが出てきたことに二人は困惑した。結局ウエルタ独りと話をする事が出来ず、四人が同席した。マデロはウイルソンが申し出た十二時間の休戦を受け入れた後、マデロがタフト大統領に直接送ったメッセージの写しをウイルソンに見せた。マデロはタフト大統領に、アメリカ軍をメキシコの領土に上陸させるのか否かを質問していた。ウイルソンは大使館に戻りさらにショックを受けた。マデロが二つ目のメッセージをメキシコ大使館経由でワシントンに送ったことを知った。マデロはウイルソンが内政干渉をしていることを大統領に抗議した。ウイルソンは、自分は誤解されているとワシントンへ打電した後、はっきりとフェリス・ディアスを支援する腹を決めた。138

二日後、マデロ大統領はタフト大統領からの回答を受けた。合衆国はメキシコに介入する意図は全くないとタフト大統領は言明した。喜んだマデロは閣僚全員にメッセージを伝えた。マデロは勇気があったが、ウエルタを抑えることができなかった。政府軍の将校はディアスに鞍替えするものが出始めていた。ウエルタは慎重に駒を動かした。計画を変更するたびに大統領に相談し、政府軍の動きが遅いといって大統領にこぼした。ウエルタは大統領にシウダデラへ総攻撃を仕掛けることを約束しながら、圧倒的な兵力が集まるのを待っているといった。また、反乱軍も防衛軍も共に政府軍であり、お互いに殺しあうのを好まず、部下は自分の命に従わないかもしれないので、焦って攻撃を仕掛けるより、シウダデラに反乱軍を閉じ込めていたほうがいい、とも言った。マデロはウエルタの計画に介入しなかった。

グスタボ・マデロはウエルタの裏切りを見抜いていたが、事態が差し迫っていることを兄に理解させることが出来なかった。大統領は政府軍を信じきっていた。タフトから電報を受け取った日、白昼十八台の荷馬車がシウダデラに入るのをウエルタの部隊が黙認したことをグスタボは兄へ報告した。大統領はウエルタを呼んで説明を求めた。ウエルタははじ

め否定したが、途中で開き直り、事実を認めた上で、反乱軍が食料の略奪をするのを防ぐため、と言った。立ち上がり考え込んでいる大統領の肩に手を当てたウエルタは、自分がそばにいる以上心配することはないとなだめた。

次の夜、グスタボはもう一度ウエルタの策略を暴こうとした。夜中、パレスの本営で半ば酩酊したウエルタを見つけたグスタヴォは、銃を突きつけ武器を取り上げると、彼を大統領の前へ連れて行った。グスタヴォは今度こそウエルタの反逆を立証しようと、彼が行った恐るべき行為を次々と質問した。ここでもウエルタはオロスコの反乱を持ち出し、巧妙な逃げ口上をうった。数日前ウエルタがディアスと会っていたとグスタボが責めると、それは単に探りを入れていただけだと逃げた。明日総攻撃に出ることを約束したウエルタをマデロは再び許し、衝動に駆られたとして弟グスタボを嗜めた。クーデター発生から九日目の午後、ウイルソン大使は初めてウエルタと合った。午後四時、大使はマデロが間もなく退位に追い込まれるとワシントンに報告した。139

2月18日火曜日、マデロ大統領は自信に満ちていた。ウエルタは総攻撃を約束したし、勝利の瞬間を予感していた。ウエルタは昨夜の出来事を恨むこともなく、にこやかな顔でグスタボを昼食に誘った。前の日にはジェネラル・アウレリアノ・ブランケが第二十九大隊四千の兵を連れて到着し、パレスの防衛にあたった。午後、マデロは閣僚会議を開いていた。午後一時半、第二十九大隊のヒメネス・リベロル大佐が突然会議室に飛び込んでくるなり大統領に詰め寄った。新たな反乱軍が侵入してきたので大統領は自分と一緒に安全な場所へ逃げるよう迫った。会議を中断されたことに不快感を抱いた大統領は拒んだ。次の瞬間兵士の一団が飛び込んで一斉に威嚇射撃を始めた。閣僚の数人が撃ち返し、リベロルが斃れた。ウエルタは後にマデロ本人が撃ち殺したと言った。マデロの補佐官二人が死んだ。そのうちの一人はマデロの従兄弟であった。マデロは指揮官を失い呆然と立ち止まったままの兵士を叱りつけ、彼等の間を通過して窓を開けると、下に向かって「大丈夫だ、今下へ行く」と怒鳴った。マデロは侵入したのは脱走兵だと思った。大統領は閣僚と共に階段を下りて中庭へ行くと、金モールで飾った煌びやかな黒い制服に身を固めたブランケを認めた。マデロが話しかけた途端、ブランケはピストルを手にして、あなたは捕虜です、と言った。140

福岡県出身田中浅次郎の経験したところによると、マデロが逮捕されたときの状況はまるで違っている。パイオニア列伝の村井謙一は、「・・・田中さんは1910年革命軍に入り、チワワで奮戦中、氏の盟友某氏は矢張り不惜身命的な向こう見ずの革命党员で、日本人でありながらマデロ將軍の側近として信頼を受けていたが、チワワへ紙幣一袋を送り『田中、メキシコ市へ遊びに来い』と招待したので、田中氏は勇み上京し、大尽遊びをして一週間でその大金を湯か水のごとく使い果たしたという奇談がある。上京するや、メキシコ市のほうがチワワにいるよりはるかに面白くなり、フィアッツの自動車部で運転を少し習ったところ、例の友人のテコがよろしく、ただちにマデロ大統領の用心棒と成り、運転手

の金ぴかの正装に包まれた彼の得意は、実に大なるものがあつた。官軍に寝返り忠実面をしていたブランケ将軍が、ソカロの官邸門衛司令官をしていたが、ちょうどその場へ田中氏が大統領車を操縦して大統領と入らんとする瞬間、同将軍の一団に全部包囲逮捕せられ、田中さんも牢にぶちこまれ銃殺を覚悟していたところ、外人たる故で放免となる・・・」田中浅次郎の盟友某氏とは、福岡県知事亀井光氏から移住先覚者として表彰を受けた西山佐一郎と思われる。141

マデロと副大統領ピノ・スワレスはパレスの主計総監室へ連行された。そこにはフェリペ・アンヘレスが既に囚われていた。アンヘレスは命令に反してシウダデラを砲撃したため、不服従の罪に問われ逮捕された。三人の捕虜はそれから四日間、何故そうなったのかに思いをめぐらせながら過ごすことになった。142

グスタボはガンブリヌス・レストランでウエルタとの食事を楽しんでいた。普段は疑い深いグスタボであったのに、ウエルタはきっと昨晚のことで自分の機嫌をとってくれていると軽く考えていた。突然ウエルタがグスタボに銃を見せてくれと言った。グスタボはそれに素直に応じてしまった。銃を渡すやいなや、ウエルタは銃口をグスタボの心臓に向け、お前は今から捕虜だと言った。グスタボはレストランで監禁された。その夜ウイルソン大使はウエルタとディアスを大使館に招いた。一同は力強く乾杯した。この会議は単なる社交ではなかった。ディアスは大使の前でウエルタへの苦情を訴えた。ウエルタが大統領を逮捕したことについて、ウエルタは協定に違反しているとディアスは言った。その上、ウエルタが捕らえたマデロ、ピノ・スワレス、アドルフォ・バツソを自分の管理下におくことをディアスは要求した。ウイルソンは仲裁者となった。最終的に合意に達したのは次の通りである。ウエルタは臨時大統領となる一方、ディアスは閣僚の任命権を得る。可及的速やかに選挙を行い、ウエルタは大統領候補ディアスを支援する。捕虜に関し、ウエルタはグスタボとバツソの二人だけをディアスに渡すことに合意した。ウエルタは大統領と副大統領を自分の目的のために確保した。143

その夜、大使館から戻ったウエルタはマデロとピノ・スワレスを呼び、国外追放と死とどちらを選ぶかと迫った。国外追放を選ぶならば辞表に署名するよう要求した。二人は署名した。マデロの家族は日本公使が、ピノ・スワレスの家族はチリ公使がそれぞれベラクルースまで送る手筈を既に整えていることをウエルタは告げた。ウエルタは約束を守る意志は毛頭なかった。ウエルタは直ちにマデロが署名した辞表を議会に提出した。大統領の第一継承者である外務大臣ラスクラインが大統領に就任した。次いでラスクラインがウエルタを二番目に継承権を持つ内務大臣に任命してから辞任した。四十五分後に議会は全ての辞任を承認した上でウエルタを臨時大統領に任命した。ウエルタは直ちに嬉々としてワシントンへメッセージを送り、自らが大統領に就任したこと、全てが憲法に則って行われたことを報告した。144

グスタボはこの時点でまだレストランに幽閉されていた。ウエルタとディアスにとって



グスタボの利用価値は既になくなっていった。ウエルタは約束どおりグスタボをシウダデラに移した。そこには主計総監アドルフォ・パッソが既に囚われていた。まだディアスの配下にあった首謀者の一人モンドラゴンが二人に死刑を言い渡した。二人は庭に押し出された。そこには酔っ払った多くの将校がいて、揶揄、罵声で迎えられたグスタボは、小突き回され、義眼を抉り取られ、もう一方の目は銃剣で刺された。血みどろになりながら拷問者の一人と取っ組み合っている間に撃たれ、倒れてから二十発もの弾を打ち込まれた。パッソは目隠しを拒み、天を仰ぎながら銃殺された。145

ウエルタは目的を達成したが、マデロとピノ・スアレスをどう処分するか、厄介な問題が残っていた。二人を処刑するか海外に追い払うか、ウエルタは迷った。正式な処刑は問題外であった。臨時大統領にもアメリカ大使館にも助命嘆願が殺到していた。キューバや日本公使、メキシコ市のフリーメーソン支部、テキサス州議会なども名を連ねていた。ウエルタは再びウイルソン大使に指示を仰ぐことにした。ナショナル・パレスを訪れたウイルソンは二人の処分について全く関心を示さなかった。二人を国外追放にするかあるいは精神病院に入れるか、との質問に対してウイルソンはこの国にとって一番良い方法を選ぶがいいだろう、とだけ言った。146

大使館でウイルソンを待っていたのは元大統領夫人サラ・マデロであった。サラは夫の命を救うようウイルソンに介入して欲しいと訴えた。自分はそのようなことに関わりたくないと言明したが、さすがに最後、主人に身体的な危害が加えられないよう保障すると、いやいや付け加えた。次にウイルソンはアメリカ政府からウエルタ政府の承認を取り付けることに全力を注いだ。ワシントンは撥ね付けた。ノックス國務長官は、マデロの処遇についてウエルタから相談を受けると言うことは、その結果について責任があり、もし人道的に扱わなければ、メキシコの評価は地に落ちるだろうと警告した。2月22日ウイルソン大使はメキシコ市の混乱をよそに、ワシントン誕生日を祝った。ウエルタの姿も見られた。その夜、ウイルソンとウエルタは控えの間で深刻な表情で話し込んでいた。147

その日マデロ、ピノ・スワレス、フェリペ・アンヘレスはグスタボが殺されたことを知り、すっかり気落ちして座り込んでいた。訪ねてきた母の前で、弟の死は自分の責任だとマデロは膝をつき、泣いて許しを乞うた。それでもマデロはまだ楽観的であった。彼はキューバか英国、あるいは日本へでも行く、それらの国の公使がウエルタと合っている筈だと言った。2月22日の夜、部屋には二人を欺くため、長期に亘り留められるかのようにベッドが置かれていた。マデロは毛布にくるまり、アンヘレスによると、泣いていたようであった。やがて消灯となるが、その数分後フランシスコ・カルデナス少佐がやってきて二人を連れ出した。マデロはアンヘレスを抱きしめてから車に乗った。二人を乗せた車が刑務所の建物の端まで来た。マデロが車から降りるなり、カルデナスは拳銃をマデロの首に当て、一発で殺した。ピノ・スワレスは建物の壁まで連れて行かれ殺された。148

ウエルタが権力を握った日、上流階級や外国の投資家たちの中にあつた内部分裂は消滅したかに見えた。彼等は挙つてウエルタ支持で糾合した。教会の首脳部も新大統領の支持を表明し、戦いが止むとメキシコ市の教会の鐘が鳴りわたり、ウエルタの前で大司教は厳かにテデウムを挙行した。殆どの州知事、官僚、議員は軍事政権を支持した。メキシコ市の戦闘で掠り傷を受けただけの連邦軍は全員一致して軍の指導者に従つた。<sup>149</sup>

ウエルタは日本公使館に頻繁に使者を送つて、「マデロ夫人、大統領の老父母の庇護について感謝の念を抱く、幸いに皆様にお怪我はないか、ご不自由はないか」と言つてきた。これに対し堀口公使は「婦人や老人子供のいるところへ流弾が入ってくる、万一のことがあつたらお互いに不名誉なので気をつけてもらいたい。我々がマデロ氏一家を庇護するには何等党派的からではない。つまり大統領の家族としてではなく、単に我が親愛なる墨西哥人として同情を寄せるまでである。貴下の明日の運命について申すべきではないが、もし貴下が今日のマデロ氏のごときことがあれば我々は進んで貴下の家族を庇護することは、マデロ氏の家族に於けると異なることはない」と回答すると、ウエルタは非常な喜びの意を表して礼を言つてきた。

大統領の家族二十数名に加え、ただでさえ多い公使館員の家族のほかに日本人の地位のある者が七名避難してきていて、総勢五十余名の食料確保に堀口公使夫妻は奔走した。大統領のご家族に十分に満足していただくために、砲弾の飛びかう下を潜り遠方へ出かけ、普段の二倍三倍と高騰する肉野菜を買い求めた。大統領の家族はパリへ亡命することになり、二十二日、公使はベラクルースまで同行して二十三人が無事故国を離れるのを見届けた。

124. 日米新聞、Sept. 25, 1913

125. 日米新聞、Sept. 26, 1913

126. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution", 1913-1917, W.W. Norton & Co., Inc., 1993, P12

127. Ibid. P14

128. Ibid. P14

129. Ibid. P15

130. Ibid. P16

131. Ibid. P17

132. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P274

133. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution", 1913-1917, W.W. Norton & Co., Inc., 1993, P18

134. 日墨協会・日墨交流史編纂委員会「日墨交流史」現代企画室、1990、P411

135. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution", 1913-1917, W.W. Norton & Co., Inc., 1993, P20
136. Ibid. P21
137. Ibid. P22
138. Ibid. P23
139. Ibid. P24
140. Ibid. P25
141. 村井謙一「パイオニア列伝」1976、P 68
142. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution", 1913-1917, W.W. Norton & Co., Inc., 1993, P25
143. Ibid. P26
144. Ibid. P26
145. Ibid. P27
146. Ibid. P27
147. Ibid. P28
148. Ibid. P27
149. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P195